

路上生活者の個人史

第12回

竹中尚文

松山 直樹 氏(仮名) 1967 年生

生まれは西宮です。生まれた頃の家族構成は、両親と私と2歳下の弟との4人家族でした。父親は、電気店を経営していました。冷蔵庫や扇風機などを売る店です。母親もその店を手伝いながら、私たちの子育てをするような生活でした。しかし、街の電気屋で電気製品を買う時代ではなくなったのです。人は大型スーパーとかで電気製品を買うようになりました。私が小学校の頃に、父親の店は潰れました。父親は転々と仕事を変えていました。母親もパートで、私たちの生活も変わりました。私は地元の小中学校を卒業して、神戸の高校に進学しました。

高校を卒業して、神戸で就職をし

ました。その会社で旋盤の仕事をしていました。神戸は鉄鋼や機械の大きな会社があって、その下請け会社もたくさんありました。そこで15年近く働きました。辞めた理由ですか。給料が上がらないのですよ。30才を越えても就職したときのままの給料では、昇給などは一切ありませんでした。だから転職しました。加古川市にある金属関係の会社に行きました。給料も良かったし、社宅もありました。転職して2年目の頃に結婚をしました。子どもが生まれて直ぐに、その会社が倒産してしまったのです。家族3人で女房の実家に転がり込みました。加古川市北部の田園地帯にある農家でしたから、大きな家でした。しばらくは農業の手伝いをしていましたが、次の

仕事を探しました。就職したのは大阪で飲料品関係の会社でした。大きな会社でした。そこで物流関係の作業をしていました。女房は子育てもあるから、そのまま実家に住み続けました。私は加古川の女房の実家から大阪まで1時間以上かけて通勤していました。そんな生活が20年近く続きました。

義父さんから、「家を建てて、独立をしてはどうか」といわれて、近所に家を建てました。それから間もなく、離婚ということになりました。理由ですか。お互いの考え方の違い、というか生活観とか人生観の違いでした。僕は離婚したくなかったですよ。上の子どもは成人していましたけれど、下の子どもは高校生と中学生でした。子どもたちの将来のこともあるし、新築の家のローンもあ

るし、心配しました。ローンは義父さんが何とかするし、子どもたちは女房が育てるというのです。仕方なく、家を出ました。

それから、直ぐにコロナが始まりました。コロナ禍の中で会社の経営状況がよくないというので、リストラにあいました。少しばかりの退職金をもらいましたが、直ぐにこの路上生活です。また、頑張って働かないといけないと思うのですが、何かもう働く気持ちになれないのです。頑張る気力が起きないのです。今は、バス停で寝ています。寝袋に入っ

今回の話を聞いていて、奥様やその家族の方々からは異なったストーリーを聞かされるかもしれないと思いました。どのストーリーが真実であるかということより、松山氏がホームレスであるという現実に関心があります。一般的にホームレスになるとするのは、人生の選択であるように思われているようです。松山氏の場合も彼の選択だといえましょうかもしれませんが、積極的に選び取った道ではありません。実際のところ、気がつけばホームレスだったということかもしれません。私たちが社会生活を送る要因に「希望」というものがあるように思います。いつか、松山氏がまた頑張って働こうという気持ちになるような日がきてほしいと思います。そんな「希望」をもてる人のつながりが結ばれてほしいと願うのです。